

共生・公正・創造



# ユニオン・EYE

<http://www1a.biglobe.ne.jp/jrtu-EWU>

ジェイアール東日本労働組合  
〒108-0014 東京都港区芝5丁目33番36号  
TEL(NTT)03-3453-2107 (JR)057-2290  
発行者/今井 伸 編集者/平 憲治

【虚構からの訣別を図るべき時期に到達したJR東日本！ シリーズ12】

## したたかな大塚人事！ その

大塚人事のポイントとして、人事・労務の主要なポストに、過去JR東労組と比較的縁の薄い場所で育った人物、一見素人的であっても東労組と貸し借りのない「人材」を宛てていることは、小著『JR東日本労政・二十年目の検証』の中でも既に述べているところである。もちろん、私も「担当者の限界」はよく承知している。企業において、労政の基本的方向を決めるのは社長であり、社長がはっきりした路線変更の方針を示さなければ、担当者が東労組とべったりとか癒着的なスタンスを執るのは、ある意味仕方のないことではある。しかしそれにしても、住田、松田社長時代の「上から下まで、競って東労組、とりわけその組合役員に媚を売る図」は、いささか異常ともいえるべきものがあった。

そういう意味で大塚体制が、そのスタートに際して人事・労務の担当者を一新したこと、またその後の人事を通じて、経営の中枢を、組合に対してはっきりとももの言える、スジを通しうる人物、少なくとも東労組と一定の距離を置く人物で固めてきたことは極めて高く評価できる。そしてその新しい体制を担う者たちは、地方勤務時代に、JR東労組との力学によって発生していた悪慣行の是正に努め、東労組のご機嫌を損なわないために「国労所属者の実績を評価するなど論外」という空気が充満していた時代に、「たとえ国労所属であっても成績抜群の者を正当に評価するのは企業として当然」との考えで人事業務を処理した人々であった。

このようなことは、私の目から見れば「当然の行動」ではあるけれども、当時のいわゆる「東労組べったり」のJR東日本にあっては「極めて例外的な行動」であったことも事実である。「したたかな大塚人事」によって、人事労務部門、及び執行部全体にこのような体制が構築されたことは、その後、表面的には遅々たるものであっても、JR東日本会社全体の“空気”を変えることになったように思われる。

以上述べたごとく、**ポスト松田社長で松崎氏が最も望んだのは「原山社長、花崎副社長」であり、次善が「松田社長続投、花崎副社長」であったことは間違いない。**そして、このどちらであっても事務系の副社長は「大塚、花崎」両氏の併立ということになる。そうなれば自らの睨みと花崎氏の強引な性格及び比類のない“腕力”とによって、「大塚社長」の目は絶対になくなる、というのが松崎戦略の眼目であったろうと筆者は睨んでいる。したがって、「大塚社長誕生」と「花崎常務転出」は、松崎氏が最も望まなかったシナリオだったと思う。**その当時、松崎氏も花崎氏も、共に「大塚社長誕生」を懸命に妨害していたことは知る人ぞ知るで、関係者の間では周知の事実である。松崎氏の狙い、花崎氏の野心を見抜いた大塚社長が、人事権の完全掌握と同時に、機敏に手を打ったことは当然である。ともあれ、大塚社長、とりわけその人事は、極めて「したたか」、というのが筆者の感想である。**